

破
戒

破戒

登場人物

瀬川丑松

土屋銀之助

風間敬之進

お志保

黒岩力也

島崎藤村

黒岩力也が来る。

力也 どうも、黒岩力也です。皆さんは島崎藤村と言う名前を聞いた事がありますよね。

日本を代表する小説家ですね。島崎藤村は小諸市に住んでいた事があるんです。

私も小諸市に住んでいるんですけど、島崎藤村の名前は知っていても小説は読んだことなかったんです。今回、「破戒」を題材にした演劇の戯曲を書くことになって、初めてちよつと興味を持ったんです。それで、まあ島崎藤村という人に、なかりスペクトと言うか、凄い人なんだなあ、という事が、資料とか藤村の書いた本を読んで思ったんです。それで「破戒」なんですけど、長い小説なんです。とりあえずストーリーに沿って少しずつ圧縮してみましたけど、元々の文章を大切にしたいなと思って、やってみたんです。でも、やっぱり小説なので、どうも上手くいかないんです。ただストーリーを辿るだけなら演劇にしましてもいいんですよね。そのまま小説として読めばいいので、その方法は諦めて別の方法を考えてみました。それで思いついたのが、最初に小説の登場人物をご紹介します、小説で印象的な場面をご本人たちに演じていただく形式です。じゃあ、早速。お一人目の登場人物をご紹介します。お名前「破戒」の主人公、瀬川丑松さんです。どうぞ、拍手でお迎えください。

瀬川丑松が来る。

丑松 えっと、どうも。瀬川丑松です。

力也 すいません。なんか緊張していますか？

丑松 いえ、大丈夫なんですけど。「破戒」の事ですよ。

力也 ああ、はい。そうなんです。

丑松 なんか何を話したらいいのか、ちよつとアレなんですけど。

力也 困ってます？

丑松 「破戒」の登場人物として、ご紹介して貰うなんて初めてなので。

力也 ですよね。でも、アレなんですよ。あまり堅苦しく考えないで。

丑松 はあ、でも昔の小説なので、私の事なんて皆さん興味ないと思いますよ。

力也 いやいや、そんな事ないです。とりあえず「破戒」の作品の中でどんな体験をしたのか、お聞きしたいのですが。率直な所、どうでした？

丑松 いやあ、そうですね。なんて言うか、とても辛かったですね。小学校の教師をしていたのですが、やっぱり子供たちと別れなければならぬのが、辛かったです。

力也 ああ、そうですね。子供たちは丑松さんの事を、かなり慕っていましたものね。敬愛していた猪子先生が無残な死を遂げられたので、あのまま父の戒めを守って

丑松 自分の産まれを隠していたら、いつか私も、そういう事になるかも知れない不安もあったのですが、その事よりも、私の事で子供たちに何か嫌な思いをさせてしまう恐怖の方が勝っていましたね。

力也 だから子供たちに謝られたんですね。私も読んでいて胸が締め付けられました。でも、あの時の言葉としては、あくまでも子供達にわかる様に視線を合わせてご自分の辛い状況をお話しされていましたよね？この人は凄い先生だなあと、感じました。

丑松 あの時は、ただ無我夢中でした。

力也 市川崑監督が「破戒」を映画にしていますよね。市川雷蔵が丑松さんの役ですけど、あの映画はご覧になりましたか？

丑松 はい。観ました。

力也 どうでした？市川雷蔵といえは、映画が撮られたあの当時、大スターですよ。

丑松 市川雷蔵、いいなあと思いました。

力也 そうですか。丑松さんご本人でも、そう思うんですね。

丑松 何か、嬉しかったです。

力也 あの映画の市川雷蔵の佇まいがいいですよ。葛藤を抱えている感じが。

丑松 同感です。

力也 じゃあ、ここで。「破戒」の中で丑松さんがどんな葛藤を経験されていたのか文章にまとめて来たので、私の方で読ませていただいてもいいですか？

丑松 ええ、どうぞ。

力也 (紙を出して) じゃあ、読みますね。(読む) 瀬川丑松が父から残された戒めは、「隠せ」の一言につきる。「たとえいかなる目を見ようと、いかなる人にも決してそれとは打ち明けるな、この戒めを忘れたらその時こそ社会から捨てられたものと思え」それとは「我は部落の民なり」という事である。丑松は秘密を抱えるが故に他人を疑い、深く考えれば考えるほど、丑松の心は暗くなる。自分はこれから将来どうしよう。一体自分は何の為に産まれて来たのだ。

丑松 すいません。ちょっといいですか？

力也 どうかしました？

丑松 それ、長くないですか？

力也 長いですか？もう少しなんですけど。

丑松 もういいんじゃないですか？皆さんも、だいたい分かったと思うし。

力也 そうですかね。

丑松 他の人も紹介するでしょ？ほら、時間が。

力也 ああ。そうですね。じゃあ、丑松さんの葛藤をもっと知りたい方は、小説を読んで頂けたらと思います。

丑松 葛藤がたっぷり書かれていますので、是非ご堪能下さい。

力也 じゃあ、次の登場人物にご登場いただきましょうか。

丑松 えっと、私はどうします？

力也 折角なので、その辺に座っていてください。

丑松 ああ、はい。(その辺に座る)

力也 それでは、次の登場人物は土屋銀之助さんです。どうぞ。

拍手でお迎えください。

土屋銀之助と風間敬之進とお志保が来る。

力也 あれ？三人、来ましたか。

銀之助 ええ、待っている間に相談して、一緒に出た方がいいかなあ、と。

敬之進 駄目でしたか？

力也 いえ、大丈夫ですよ。どうぞ、こちらに。さあ、どうぞ。

銀之助 じゃあ。お志保さん、こっち。どうぞ。

お志保 ああ、すみません。

力也 えっと、まずは自己紹介からお願いしてもいいですか？

お志保 はい。あ、私からですか？

力也 お志保さんから、どうぞ。

お志保 お志保と申します。こういう場は不慣れなもので、よろしく願います。

力也 よろしく願います。じゃあ、次に風間さん。お願いします。

敬之進 はい。只今ご紹介にあずかりました。風間敬之進と申します。本日は、

こう言った晴れ晴れしい場にお呼びいただきまして、恐縮しておる次第ですが。

えー。吾輩は、ですね。先ほどご挨拶いたしました、お志保の父なんですけど。

「破戒」をお読みいただいている方々は、存じかと思いますが、本当に不甲斐ない

父親でありました。吾輩は情けない男でして。

銀之助 風間さんは、情けない男では、ないです。

敬之進 いやいや、銀之助君。君も知っている筈だよ。吾輩がどんな父親か。

お志保 お父様。そんな風に自虐なさるのは、もうお辞め下さいませ。銀之助さんもお困りですよ。私だって、お父様を情けないなんて思った事はありませんから。

敬之進 こんな父を許してくれるか？

お志保 許すも何もありません。私にとってお父様は、優しい父親でしたよ。

敬之進 ありがとう。ありがとう。吾輩は幸せ者だよ。本当にお志保は優しいなあ。

力也 そうですね、お志保さんは芯がしっかりしていて優しいですよ。

お志保 そんな事ありません。あ、銀之助さんの自己紹介がまだでしたね。どうぞ。

銀之助 えっと。僕は土屋銀之助と申します。「破戒」で、瀬川君とは、飯山の小学校の

同僚の教師でした。そちらの風間さんも同じ教師です。

敬之進 ええ。吾輩も教師でした。

銀之助 僕は瀬川君の良き理解者でありたいと思っておりました。

力也 銀之助さんは、本当の親友でしたよね。丑松さんの味方でした。

銀之助 産まれや身分で差別するなんて許せません、瀬川君に味方するのが当然です。

力也 丑松さん。親友に一言どうぞ。

丑松(立って)えっと。その節は、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

銀之助 おい。そんな風に、改まって言われると気恥ずかしいなあ。

敬之進 こうして、お二人の友情を身近に感じると、人間も捨てたもんじゃないなあ、と思いますなあ。(力也に)ねえ。そう思いませんか？

力也 思います。えっと。じゃあ、「破戒」の登場人物で来てくださっているのは以上の

四名なんですけど。実はですね、小説の登場人物ではないのですが、皆さんに

ご紹介したいお方に来ていただいております。最後に、ご紹介いたしますのは

「破戒」の著者、島崎藤村さんです。どうぞ、拍手でお迎えください。

島崎藤村が来る。

藤村 いやー。どうも、ご無沙汰しております。島崎藤村で御座います。

力也 どうぞ、こちらに。真ん中に来ていただいて。

藤村 すいません。ここでいいですか？端っこの方が落ち着くので。

力也 そんな、そんな。どうぞ、どうぞ。

藤村 本当に、ここで充分なのです。実は苦手なんです。人前に出るの。

力也 そうですか。じゃあ、このままお話しさせていただきますけど。

藤村 ええ。どうぞ。実は私、昭和18年に没したんですけど。やっぱり死ぬと、なかなか人前に出るのが、アレなんですよね。

敬之進 昭和18年ですか。じゃあ、没後70年以上たっていますかね？

藤村 ええ、そんなもんですね。

敬之進 いやー、光陰矢の如しですな。お顔もちょっと変わりましたかな？

藤村 ここに存在する為に、ちよつとしたコツがいるんですね。そのコツを会得する為の代償として、顔がちよつと変わるんですよ。

敬之進 はあ、なるほどね、そういう訳ですか。

藤村 でもね。本当に今日は来てよかったです。皆さん、ありがとうございます。

力也 そんな、そんな。御礼を言いたいのはこちらです。

藤村 先ほど、劇の練習を皆さんとして。久しぶりに、本当。楽しかったです。

力也 ありがとうございます。(お客に) そうなんですよ。これから演じていただく劇の練習をさっきまでしたんです。あの、藤村先生とお呼びしていいですか？

藤村 どうぞ。どうぞ。

力也 じゃあ、藤村先生と呼ばせていただきますけど。こうして今日、来ていただく事が決まった時に、折角なので、藤村先生も演劇にご出演いただこうと、皆で相談しまして、お願いしたんですけど。ご快諾いただきまして、思い切って言うてみるもんだなあと思いました。

藤村 驚きましたけどね、出演のオファーが来たときは。

力也 まあ、ご快諾いただいたので、今日は藤村先生の名演技に期待して下さい。

藤村 いやいや、私などは、大根役者ですから。

力也 大根なんてとんでもないです。なかなかいい味出していましたよ。

藤村 藤村先生には主に、ト書きと、丑松の親父の役ですね。

藤村 とにかく精一杯、頑張ります。皆様、よろしくお願い致します。

力也 では出演者の皆様に、劇の準備に取り掛かっていただきましょう。お願いします。

力也と藤村以外、去る。

力也 それではスタンバイの間に、藤村先生に詩の朗読をしていただきたいと思えます。

朗読する詩は、もちろん藤村先生の詩です。藤村先生、よろしいですか？

藤村 (紙を出して) はい。いつでも、どうぞ。

力也 お願いします。どうぞ。

藤村 (朗読) 島崎藤村「初恋」まだあげ初(そ)めし、前髪(まえがみ)の。

林檎(りんご)のもとに、見えしとき。前にさしたる、花櫛(はなぐし)の。

花ある君と、思ひ(い)けり。やさしく白き、手をのべて。林檎をわれに、

あたへ(え)しは。薄紅(うすくれなひ)の、秋の実に。人こい初(そ)めし。

はじめなり。わがこゝろなき、ためいきの。その髪の毛に、かゝるとき。

たのしき恋の、盃を。君が情(なさけ)に、酌(く)みしかな。林檎畑の、

樹(こ)の下に。おのづ(ず)からなる、細道は。誰(た)が踏みそめし、

かたみぞと。問ひ(い)たまふ(う)こそ、こひ(い)しけれ。

力也 はい。どうも、ありがとうございました。それでは、準備が整った様なので

始めさせていただきます。場面は主人公の丑松が当直の夜に、聞こえるはずのない父の声を聴く、という場面と丑松の父が牛に襲われる場面です。それでは、どうぞ。

力也、去る。

音楽。

藤村 これは過去の物語である。過去には後の時代に取って、反省すべき事柄も多い。

過去こそ、真実であるからであろう。どうも島崎藤村です。「破戒」始めます。

天長節の夜は宿直の当番であったので、

瀬川丑松と土屋銀之助の二人は学校に残った。

銀之助が来る。

藤村 風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

敬之進が来る。

藤村 夕飯の後、まだ宿直室で話しこんでいるうちに、時計は八時打ち、九時打った。

それは翌朝の霜の烈しさを思わせるような晩で、寒かった。丑松が見廻りに出て行った後、敬之進は火鉢に鬩り付いていた。二十分ばかり経って丑松が帰って来た。

丑松が来る。

銀之助 おい、どうした？

敬之進 顔色が悪いですよ。

藤村 丑松は話そうか、躊躇する。二人が見守るので。

丑松 実は、不思議なことがあるんだ。

銀之助 不思議なとは？

丑松 校舎を一廻りして、運動場の木馬のところまで行くと、誰かが呼ぶ声があった。

聞いたような声だと思ったら、そのはずさ、僕の親父の声なんだ。

銀之助 妙なことが有るものだな。

敬之進 どんな風に君を呼びましたか、その声は。

丑松 丑松とつづけざまに。

敬之進 君の名前を？

銀之助 馬鹿な、そんな事があるものか。

丑松 確かに呼んだんだよ。親父の声だった。

銀之助 本当かい？また欺へかつゞぐつもりだろう。

丑松 本当だよ。確かに聞いた。

銀之助 お父さんは西乃入へにしのいりへの牧場だろう。あんな遠くから君を呼ぶなんて馬鹿らしい。

敬之進 しかし、そう一概に言ったものでもないよ。

藤村 急に丑松は聞耳を立てた。顔色を変えて恐れを表したのである。

丑松 や。また呼ぶ声がある。僕はもう一度行って来る。

丑松、歩き回る。

藤村 銀之助は友のことが案じられる。敬之進は驚いてしまって、何かの前兆ではあるまいかと考える。

敬之進 どうも気掛かりだ。どうでしょう、我々も行って見てやっては。

銀之助 そうですね。

敬之進と銀之助、丑松の後を追う。

藤村 丑松は、声のする方を辿って行った。何もかも夜の空気に包まれ、静かに闇に隠れて居るように見える。

藤村、「親父」と書かれたお面を被る。

丑松 こっちかな？

藤村（親父） 丑松、丑松。

丑松 おとっさん、おとっさん。どこですか？

銀之助（丑松に） やあ、こんな所にいたのか。

丑松 さっき。また、親父の声が。

敬之進 声が？

銀之助 そんなことは理窟に合わん。きっと神経のせいだ。

丑松 そうかなあ。

銀之助 聞こえるはずのない声が聞えるなんて、疑心が産み出した幻さ。

丑松 幻？

銀之助 耳に聞える幻。いわゆる幻聴だよ。

丑松 そうかも知れないけど。

藤村（親父） 丑松、丑松。

丑松 おとっさん、おとっさん。

銀之助 おい、君。どうした？

丑松 今、また声が。

敬之進 今？

銀之助 何も聞こえなかったぞ。

丑松 そうか。(敬之進に)何か聞えましたか。

敬之進 いいえ、吾輩には何も。

銀之助 君以外、声は聞えない。まあ、僕は信じられないね。目で見たって信じられない。この手で触って、それからでなければ信じられない。はははは。それはそうと、やけに寒く成ってきたな……行こうか。

丑松 ああ。

銀之助、去る。

敬之進 翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。

父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。

銀之助、牛の角の様な物を持ってきて、

藤村(親父)を突き刺し去る。

藤村(親父) 丑松、丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、

いかなる人に巡り合おうと決って打明けるな、一時の感情や気の迷いで、

この戒《いましめ》を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。

隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多《えた》の秘訣じゃ。

丑松 おとっさん、おとっさん。

音楽。

カ也が来る。

カ也 ありがとうございます。いかがでしたでしょうか？小説の「破戒」は、

本当に素晴らしい小説ですので、皆様も是非ご一読ください。最後に藤村先生、作詞の歌。「椰子の実」を歌って終わりにしたいと思います。もし一緒に歌いた方がいいましたら歌詞を印刷した紙がありますので、一緒に歌っていただけたいと思います。じゃあ、出演者の皆様、歌の準備はよろしいですか？歌詞が欲しい方は、お配りしますので拳手をお願いします。いいですか？それでは、歌いましょう。「椰子の実」どうぞ。

出演者たち「椰子の実」を歌う。

名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ
故郷（ふるさと）の岸を離れて 汝（なれ）はそも 波に幾月

旧（もと）の木は生（お）いや茂れる 枝はなお影をやなせる
我もまた渚を枕 孤身（ひとりみ）の 浮寝（うきね）の旅ぞ

実をとりて 胸にあつれば 新たなり流離（りゅうり）の憂（うれい）
海（うみ）の日の 沈むを 見れば 激（たぎ）り 落つ異郷（いきょう）の涙

思いやる八重の汐々（しおじお）

いずれの日にか 故国（くに）に帰らん。

力也 はい。ありがとうございます。では、これで終わりです。

最後に少しだけ、私の方からご挨拶したいと思います。

藤村先生の「破戒」は戒めを破ると書きます。これまで私は、演劇や自己表現などをしてはいけない人間だと思っていました。

それ程の価値がある人間ではないと、自らを戒めて生きてきた所があります。でも、藤村先生の「破戒」に取り組むことによって、

その戒めを破る事が出来たと思います。戒めを破る事によって表現の自由を手に入れる事が出来ました。感謝、申し上げます。

「破戒」のラストで、テキサスに旅立つ為に東京へ向かった丑松さんの様な気持ちです。本当に、ありがとうございます。

最後に素晴らしい演技をご披露していただいた、出演者の皆様に温かい拍手を、お願いします。

本日は、ありがとうございました。

おわり

原作／島崎藤村
脚本／黒岩力也